

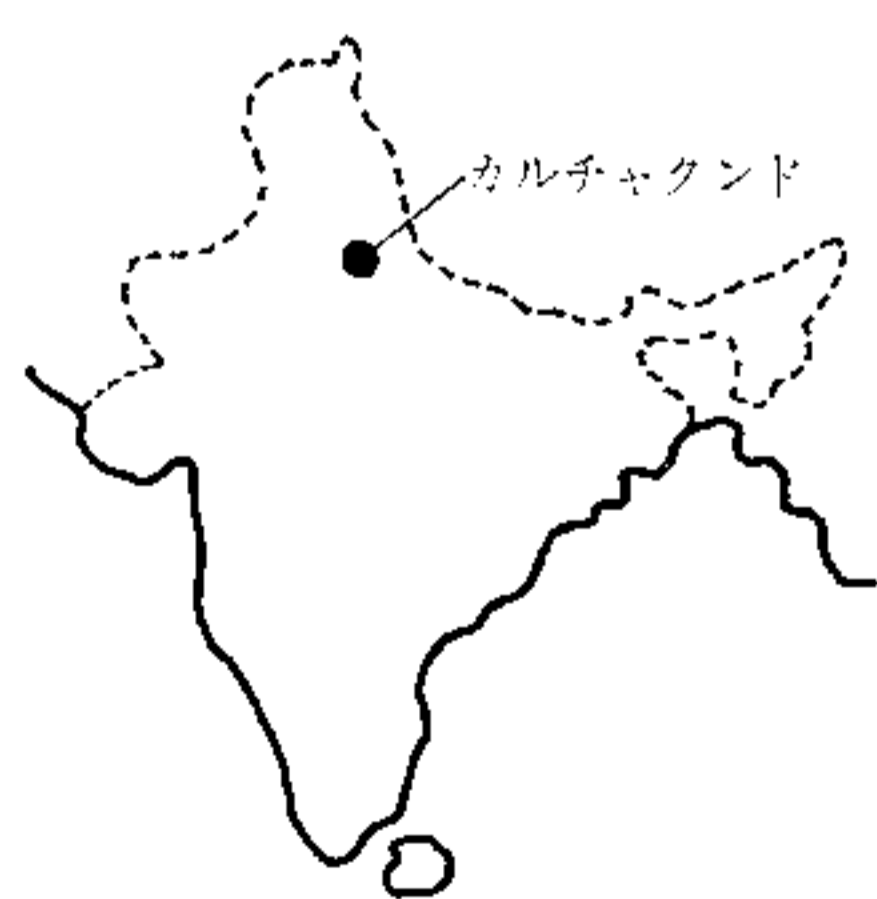
ガンゴトリ

カルチャクンド

(六六三二メートル)

谷村 吉隆

解禁後、未踏峰が次々と登頂されているガンゴトリで、いちはやく全員登頂を果たした登嶺会。次にバリエーションの時代がやってくると期待する。



ガンジス河(ガンガ)の源流のひとつであるバギラッティ川の源をガンガの始まりという意味でガンゴトリと呼ばれている。ここにはインド最長の氷河である

ガンゴトリ氷河を中心にして、(六五四三)サトバント(七〇七五)などの六〇〇〇と七〇〇〇の美しい峰々がそびえている。

ところがこの山群は、中印国境に近いため軍事上の問題から長い間外国人の立ち入りが禁止されていた。その間インド人によって登山が行われていたが、未踏峰の宝庫となって今日に至った。そして昨年この山群の一部が外国人にも開かれ、多くの登山隊の注目するところとなった。登山申請の殺到するなか、われわれは未

踏峰のひとつであったカルチャクンドの登山許可を取得することに成功した。

カルチャクンドは全長三〇キロといわれるガンゴトリ氷河のほぼ中ほどの左岸に位置し、ピラミダルな姿で氷河から一気にそびえ立っている。頂上からは北稜、東稜、南稜が切れ落ちており、北稜の上部からは西稜が派生している。そして、岩、雪、氷がミックスしているうえに岩壁帯、クレバス帯もひかえている複雑な地形をしている。そのためか、過去にインド隊が二度攻撃しているがいずれも2まで登っただけで敗退していた。

われわれも、ルートファイディングはもとより、雪崩やスリップには随分と神経を遣わされた。しかし、何よりも雪

劣させられたのはベースキャンプ(BC)から頂上まで直線距離で一六キロという山の奥深さであった。

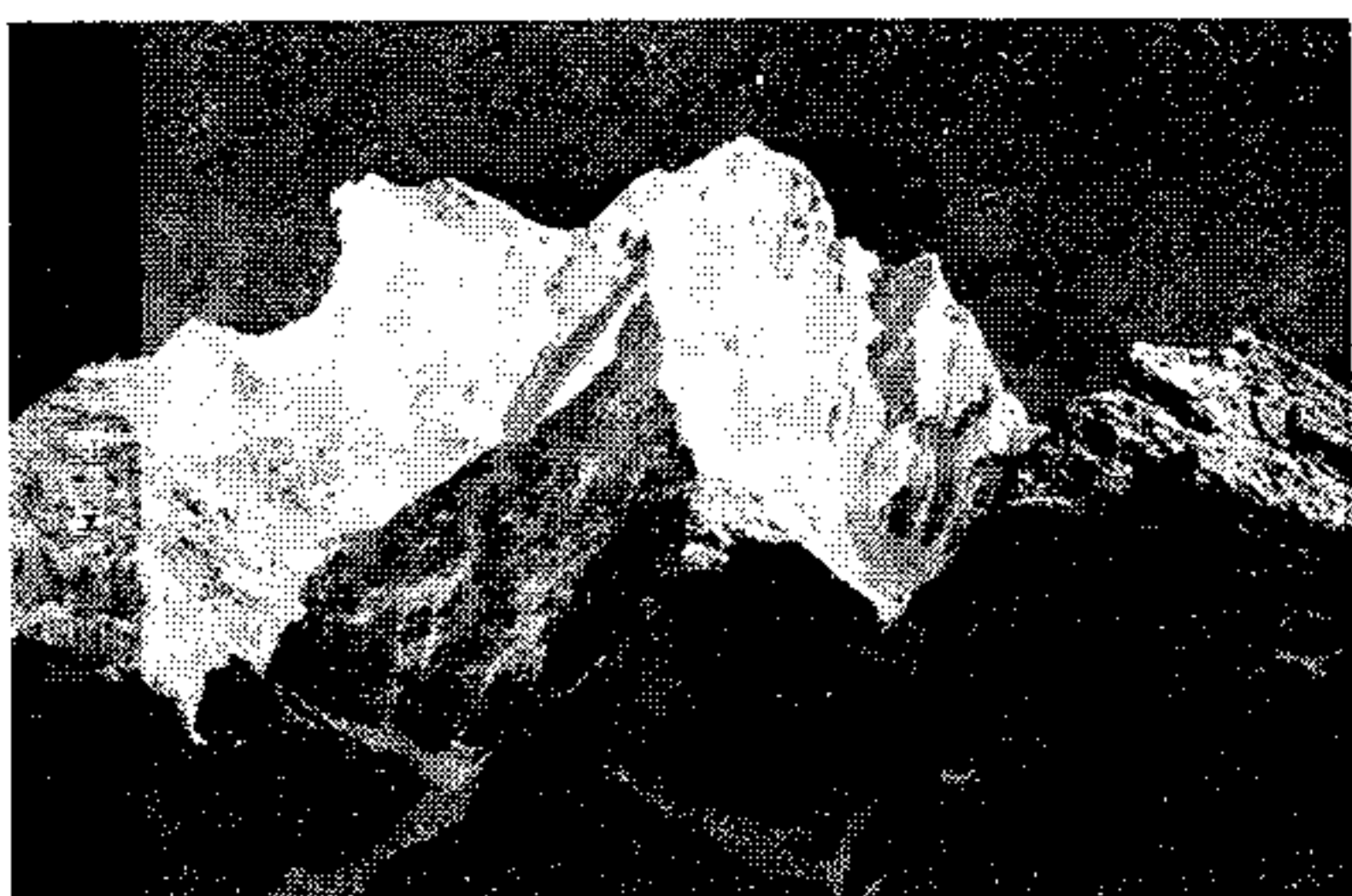
この山に向かった登嶺会の会員は、隊

隊員だけの長いアプローチの輸送

一週間前に成田を発った先発隊がかなりの手続きを済ませていたので、四月十九日に出発した本隊は合流の後、早くも二十三日にニューデリーからベースキャンプへ向かってチャーターバスで出発することができた。ベースキャンプまでのバスやボーターの手配はすべてニューデリーのエージェンツに任せただけで、気楽にアプローチを楽しんでおればよかった。

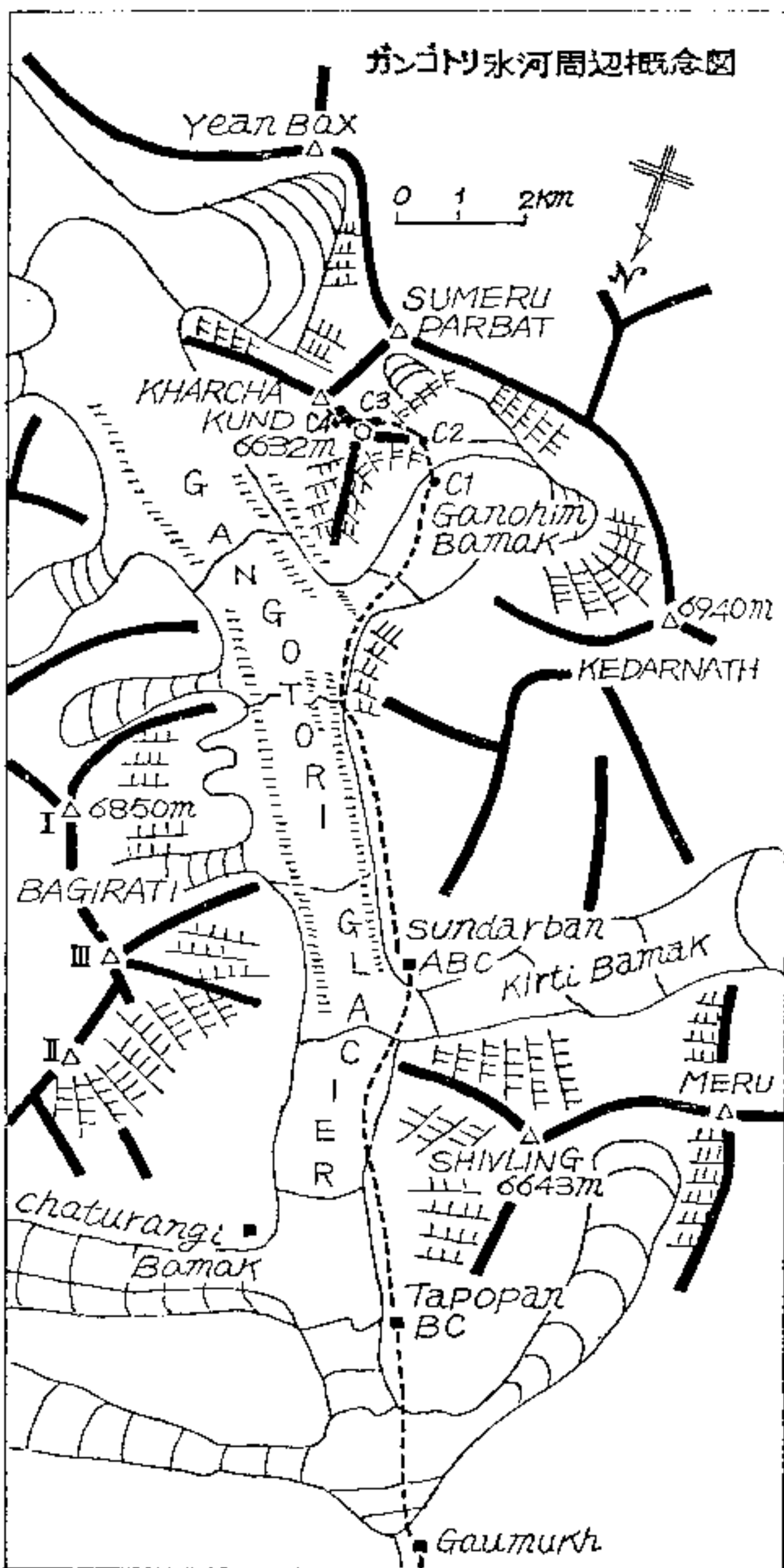
長・宮原末夫、隊員・山中芳樹、橋本利治、水野正雄、谷村吉隆、上野馨の六名であった。

二十四日、リシケシで一日滞在。エージェンツの息のかかった、リエゾンオフィサー、サンジャイ・アナンを迎える。二十五日、ウツタルカシに到着。そこにはエージェンツの社員がボーターの手配を済ませてわれわれを待っていた。二十六日はランカ泊まり、ウツタルカシとガンゴトリの間は、途中水害で道が分断されたままになっている箇所と橋の架かって



ない場所を除けば、あとはローカルバスが利用できるのかかなり時間が短縮される。二十七日、バスの終点ガンゴトリを経てボジュバスまでキャラバンをする。多くの巡礼者が訪れる所だけに、道はきちんと整備されている。ボジュバスに着いた時は真っ暗になっていた。そして、二十八日にはBC地点となったタポパンに早くも着くことができた。本隊が日本

ガンゴトリ氷河周辺概念図



出発してから、まだ九日目のことであつた。

タポパンの入口で初めてカルチャタンDを垣間見ることができたが、それはまだかなり遠かった。そして悪いことには、膝まで雪にもぐるため靴の中はびしょ濡れとなつてとても冷たい。これではポーターがタポパン以上にあがらないのは仕方がない。当初はここからさらに一日進んだ地点にBCを建設する予定だったが、やむをえずタポパンにBCを置くことにした。

タポパンは標高四三〇〇呎、怪峰と呼ばれるシブリンを真上に仰ぐ平坦な場所

で、雪が解けると川が一筋流れる緑の草原となり、色とりどりの花々が可憐に咲く別天地となる。その頃には、自然石を巧みに利用した石室に、ヒンズー教の修業僧がやって来る。その修業僧の質素な生活振りをまねたわけではないが、われわれもできるだけシンブルに登ろうという主旨なので、ハイポーターは使わずに自分達の肩だけで荷上げすることに決定した。

そして、ガンゴトリ氷河を上流へ偵察した結果、アドパンスペースキャンプ(A BC)を、ガンゴトリ氷河とキルティバ

所に建設することにした。そこはスンドルパンと呼ばれ、標高四五〇〇呎、付近に池もあり、キャンプ地としては格好の場所だった。

五月一日から本格的に荷上げ作業を開始する。

だが、ABCまでの距離の遠さと氷河上の歩きにくさでなかなかはかどらない。エリジェントの社員とコックまでもが手伝ってくれたが、荷上げ作業が完了したのは十三日になってしまった。雪のない時期ならポーターがスンドルパンまであがるのでたった一日で済んでしまうのだが。



ガンゴトリ氷河からのカルチャクンド峰

この間、橋本と谷村の二人でカルチャクンドの西面と南面の偵察を行った。そして後頂ルートとしては西面に入り、ガ

登攀開始、「仏のすべり台」を抜けて

予期しなかった荷上げ期間が入って来てしまったために、BC、ABCと現地食のみで過ごす日数が長くなってしまった。そのため不足してきた現地食や灯油を買いにリエゾンオフィサーはコックを連れてウツタルカンへおりにいった。ABCからの荷上げはまったく自分達だけでやらなければならなかった。

C1へは、ABCから続く氷河の縁の盛り上がった上手の上を進み、それが消えてしまいう所でケダルナートドームから落ちて来た尾根の末端岩壁の下をトラバースしてガンゴトリ氷河におりる。そして雪にかくれたクレパスに注意しながらモレーンの小丘をいくつか越えて右のガ

ノヒム氷河の最上部のセラック帯を詰めて行くのが最も可能性があらうということになった。

ノヒムバマックへ入って行く。ガノヒムバマックは雪原状にひろがっていて、カルチャクンドも全貌を現す。C1地点はそのガノヒムバマックを突き進んで、カルチャクンドの西稜の末端の手前であった。

十五日にC1を設営。ここからやっとカルチャクンドの登りとなる。山中と谷村でC2へのルートワークを行い、他の四名で、C1への荷上げを行う。C2までは高度差四五〇級の西稜側面の傾斜のある雪壁登りであるが、雪質がよく雪崩も問題なかった。十七日に西稜上にC2を設ける。ここは標高五三五〇級あり、まわりの展望はぐつと開けてきた。氷河か

ら一気に頂上付近までそそり立つケダルナートドーム南壁の大スラブが印象的だ。目を反対側に転じると、下からはよく見えなかったガノヒムバマック上部のセラック帯や西稜の上部がよく見える。

この頃から天気が崩れてきて、毎日午後になると激しい風雪となった。一度全員がABCに戻った後、山中、谷村はC3へのルートワークを、橋本、水野はC2への荷上げを、富原、上野はC1への荷上げをと三パーティに分けて行動する。二十日、四名がC2に集まって今後のルートを検討する。その結果、ガノヒムバマック上部のセラック帯の通過はかなりやっかいそうであり、雪崩の危険もあるのに比べ、西稜の方が距離が短く安全性も高いことから西稜ルートを探ることにした。

二十一日、西稜を五七〇〇級までルートワーク。途中一カ所ルートが岩壁で分断されており、そこを登ってはみたものの

柏瀬祐之・岩崎元郎・小泉 弘編 全10巻

日本登山大系

●本邦初のバリエーション・ルート・ガイドの集大成●岩場・沢・冬期尾根ルート約四千を完全収録●豊富なルート図・概念図と詳細な解説●全国百数十に及ぶ精鋭山岳会、山岳部による執筆

3 谷川岳

第3回配本 10月下旬刊
A5判写真八頁
本文二七〇頁
定価二六〇〇円

収録山域トマチガ沢／一ノ倉沢／幽ノ沢／堅炭岩／芝倉沢／湯桶曾川／南面の沢 幕岩／小出俣川／阿能川岳／赤谷川／仙ノ倉谷／万太郎谷／茂倉谷／檜又谷／足拍子岳／荒沢山／奥利根／上州武尊岳——松本龍雄(巻頭エッセイ)／岳志会／山学同志会／月稜会／登山会／F・アルパイン・クラブ／本庄山の会／登歩溪流会／東京山岳会／ゼフィールス山の会

北海道・東北の山

7 槍ヶ岳・穂高岳

既刊 1 2 回配本 定価二一〇〇円
1 回配本 定価二一五〇〇円

白水社

101東京都千代田区神田小川町3-24 標榜東京9 33228 電話291-7811



残りの四名はC2泊まり。二十七日、C3の二人が上部ヘルトを伸ばしC3へ戻るとともに、橋本、水野、谷村もC3に入った。これでほぼ全員の高高度順応ができたわけだ。ここま

でフィックスド・ロープは六〇〇メートル使
C3は数張りのテントがやつと張れる
広さしかなくロック
ハーケンを打ってテ
ントを固定。またC
3より見た前衛岩峰
は赤茶色のビルディ
用。

二十七日、北稜上の六二五〇メートルの
を経て六三七〇メートルまでルートを伸ばす。
C3よりコルまでは下にクレバスが口を
開けた急な雪面を登る。フィックスは二
〇〇メートル、自作のスノーアンカーが威力を
発揮した。C2より山中が登って来たが、
途中にデポしておいた食糧が雪崩に流さ
れてしまったことがわかり、C3には二
日半の食糧があるのみとなってしまった。
そこで今後のことを検討した結果、あと
一日でC3からルート上作をしながら頂
上に立てるかどうかが疑問であったが、残
りの食糧で全員が登頂できるようにする
ために、橋本、谷村が明日頂上を目指す
とともに、宮原、山中、上野の三人がサ
ポート隊となり、コルにC4を設置する
ことになった。

最後の五〇メートル雪壁をダブルアックスで

二十九日午前四時三〇分、C3を出発
したアタック隊は一時間半で六二七〇メ
ートルまで登る。コルからは頂上直下の
セラック帯の登攀がやつかいである。ス
タカットでザイルを伸ばしながら、少し
ずつ高度をかせぐ。セラックの下をトラ
パスし、七〇度ほどの雪壁を登り、ま
たセラックの下をトラパスして行く。
ケダルナート南壁が朝日に輝き、その左
側には地平線がはるかかなたに霞んでい
るのが見えるが、進路はセラックだらけ
で、今日中の登頂の見通しは暗いかのよ
うに思えた。しかし、大セラックの下を
左にトラパスした時、それまで行く手
をさえぎっていたセラックはもうなくな
り、頂上には緩傾斜の広大な雪壁が広が
っているだけで、その一番奥には山頂が
あった。

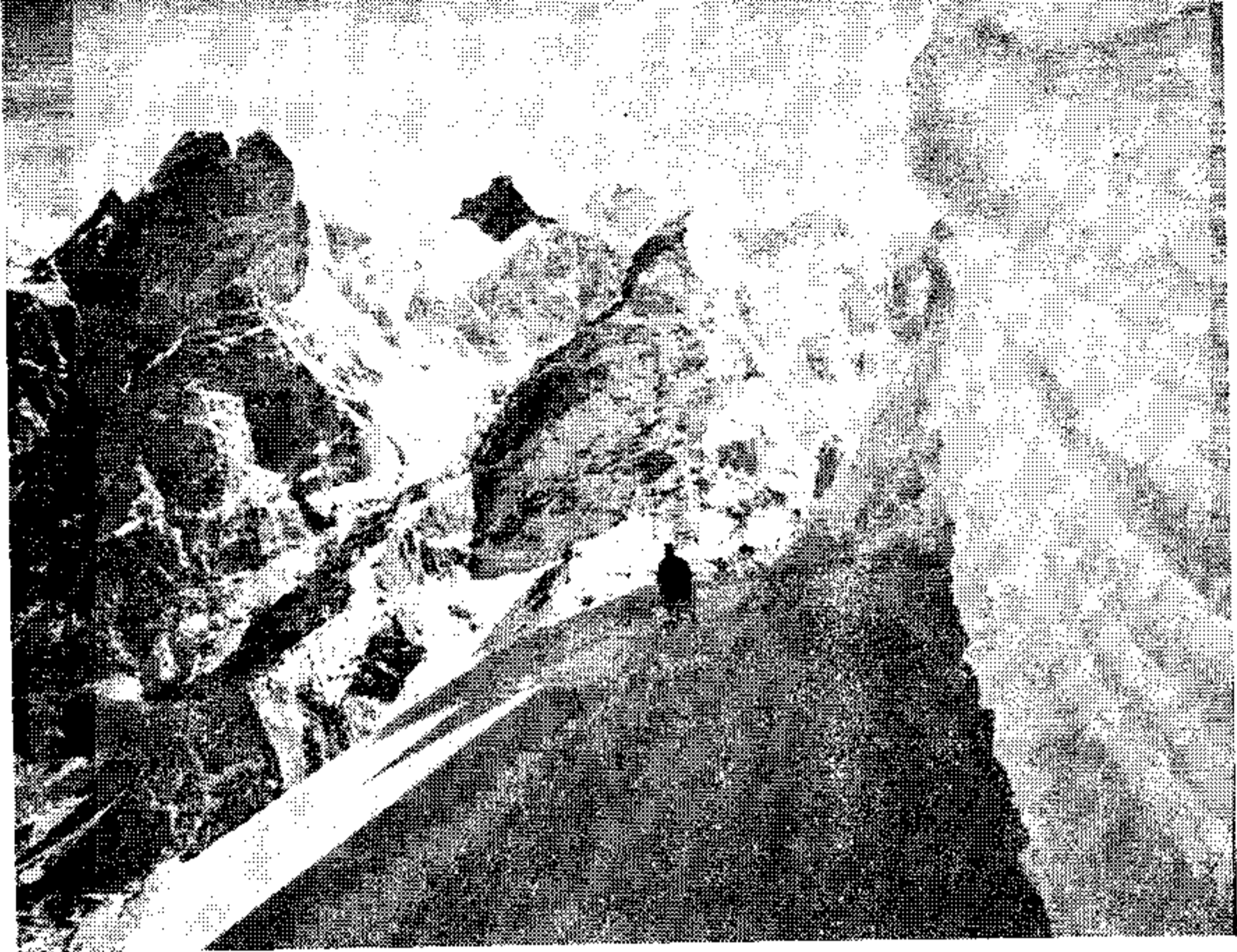
一步また一步といつまでも続く雪壁を
辛抱強くラッセルする。初めて経験する

やっかいな部分となりそうだったので、
なんとかここを巻けないものかとルート
を捜す。オーバーハンクした西稜側壁の
中にバンドとそれに続く雪壁があるのを
発見、かろうじて通過することができた。
このバンドと雪壁はあまりにもありがた
かったのでそれぞれ「仏のトラパス」、
「仏のすべり台」と名づけた。そこを抜
け出した所から西稜右側面の急な雪壁を腰
まで雪にもぐりながらトラパス気味に
登り、天気が悪くなった時点でC2に戻
った。

消えたトレールを新たに付けながら登り、
五九〇〇メートルにC3地点を確認した。ルー
トは斜面を右斜上して行くのだが、傾斜
が急で雪崩も起き易い嫌な所だ。斜面を
登り終わった所は西稜の支稜となってい
る雪稜の上であったが、その稜が前衛岩
峰に消えてしまふところにテントをデポ
してC1へ下る。この日初めて全員がC
1に集まることのできた。

二十四日より高度順応の遅れた四名が、
順応しながらC3へ荷上げを行い、山中
と谷村はC2への荷上げを行う。
二十六日、宮原、上野がC3に入り、

二十三日、前日の風雪のためすっきり



C4から頂上への登り 背後はバギラッティI峰

高度なのに不思議と調子がよい。待ちに待った頂上に立てるといふ喜びがそうさせているのだろう。そして最後の五〇分の雪壁をダブルアックスで越すとそこは山頂であった。時計を見ると一五時一分を指していた。ガンゴトリ氷河最奥のチャウカンバ（七一三八m）からサトバント、バスキバルバット（六七九二m）などの山々が一望でき、北西にはこれまで歩いて来た氷河が足もとからずっと見

ガンゴトリにも「大岩壁登攀の時代」が

ガンゴトリの山々はヒマラヤとしては低い六〇〇〇m峰が大部分であるが、二〇〇〇mクラスの大岩壁をもっている山が数多くみられた。ガンゴトリ山群は長い間外国人が立ち入れなかったことから未踏峰も数多く残っているが、それがなくなってしまうのは時間の問題であろう。しかしだからといってこの山群の魅力が下がるのではなく、むしろ未踏峰がなくなり、大岩壁の登攀の時代となった時にその真価が発揮されると私は思っている。

マッターホルンやアイガーよりずっと大きな岩壁がまだまったく試登すらされずに残っているのだ。そしてこの山群の持筆すべきことはアプローチの短さである。道路が全面開通すれば、わずか三日間という短時間でニューデリーからBCまで入ることもそんな遠い将来ではない。また、面倒な登山に関する手続きやホータ

渡せた。

三十日、第二次アタック隊が出発。隊長の宮原と上野はC4から、山中と水野はC3からの登りであった。カルチャクソドはこの日も快晴。一〇時過ぎには登頂の知らせがトランシーバーから聞こえてきた。この瞬間に念願の全員登頂が達成されたのである。使用したフィックスド・ロープは一二〇〇m、実質的な登山活動はわずか二週間の成果であった。

この雇用は急遽してきたエージェントを使えば従来よりずっと楽に済んでしまい、アルパインスタイルで登るにはもってこいの山群である。

また、一般の登頂ルートをたどるなら合宿形式も可能であろう。日本を出国してから帰国するまで一カ月あれば登れる山も幾つかある。だから費用も大変安く行けるわけだ。われわれの隊は六名であったが各人の負担金は五五万円ですべて済んでいる。

ガンゴトリ山群の解禁で、ヒマラヤ登山はより一歩身近なものへ大きく変わる可能性を秘めている。

（登頂会会員）

登頂会インドガンゴトリ登山隊

隊長・宮原末夫(37)、隊員・山中芳樹

(29)、橋本利治(39)、水野正雄(39)、谷

村吉隆(19)、上野馨(20)